

「NAB Show 2018」レポート(3)



神谷 直亮

「NABショー2018」に関する3回目のレポートをお届けする。

あらためてNABが今回最もアピールしたかったのは何かを振り返ってみると、「米国における新放送規格ATSC3.0に基づく試験放送の進展」ではないかと思う。理由は、中央ホールのロビーに「The Road to ATSC3.0 (ATSC3.0への道のり)」と名付けた特設コーナーを設けて、進展状況を示す展示とデモを熱心に行っていた。具体的には、アリゾナ州フェニックス、オレゴン州ポートランド、テキサス州ダラス、ネバダ州ラスベガス、オハイオ州クリーブランド、ノースカロライナ州ラーレイなどの放送局がすでに行っている試験放送の模様をテレビで紹介し「フェニックスのパールTVコンソーシアムが4月5日から先陣を切って実用放送を始めた」とうれしそうに話していた。

新放送規格に対応できる新しいテレビのメーカーを問い合わせたら、「LG電子が、提供している」との回答であった。また、このコーナーには、車内に4台のモニターを設置した自動運転車が持ち込まれており、



写真1 次世代テレビの特設コーナーでは、アリゾナ州フェニックスで実用放送が始まったとの発表が行われた。

「ATSC3.0による新しい放送が普及すれば、移動中でもテレビ番組をクリアに受信して視聴することが可能になる」とPRに余念がなかった。さらに、「IPがベースなので、インターネットによるターゲット広告もできる」という。韓国では、2017年5月から同方式による放送が始まっており、「America First」とはならなかったが、なんとか追いつこうという米国放送業界の意気込みが強く感じられた。なお、説明員は、「アメリカと韓国以外に、カナダとメキシコでもATSC3.0方式の放送が行われる」と付け加えていた。

次いで、北ホールに「イノベーション・パイプライン」「Immersive Storytelling」「デジタルラジオ」「マネージメント & システムズ」と名付けられた3つの特設ステージが設営され、多くの出展者が最先端を誇る成果を紹介していた。

「イノベーション・パイプライン」のステージでは、NHK、韓国の地上波放送局、ウルトラHDフォーラムが競演した。NHKは、お馴染みの8Kシアター（350インチ



写真2 NHKは、8Kコンテンツを視聴できる小部屋を3種類用意して来場者に体験を促していた。

スクリーン)で、アメリカの「イエローストーンの驚くべき自然」とロシアのマリンスキーバレエ団の「くるみ割り人形」を上映して来場者の注目の的になった。他方で、8Kコンテンツを視聴できる小部屋を3種類用意して来場者に体験を促した。3種の内訳は、70インチLCDテレビ(シャープ製)と2台のラウドスピーカーによるパイノール音響、85インチLCDディスプレイ(東芝製)とディスプレイに組み込まれたラインアレイスピーカーシステムによる音響、98インチLCDディスプレイ(BOE製)とフル22.2チャンネル音響であった。ハード面では、8K 240pカメラの試作品とスローモーションリプレイシステムが話題を集めていた。

韓国のKBS、MBC、SBSは、合同でATSC3.0規格に基づく地上波放送とOTTのハイブリッド・プラットフォーム・サービスのデモを行って関心を呼んだ。さらに、韓国電子通信研究院が、3波の放送電波にそれぞれIDを付与してモニタリングを行うデモを実施した。ATSC3.0規格で使用されているSFN(Single Frequency Network)は、パルチパスに弱いとの指摘があるので、この弱点を補うために考案した技術である。

ウルトラHDフォーラムは、NBCから提供を受けたという平昌オリンピックの4K HDR映像を再生しながら、今後のフォーラムの方針として、「ハイフレームレート(100p/120p)への対応、コンテンツのセキュリティ対策、次世代オーディオの導入」を挙げていた。セキュリティ対策の内容を聞いて見たらウォーターマーキングを



写真3 VRのステージでは、Insta360が「Insta360 One」「同 Pro」「同 Nano S」の売込みを熱心に行った。

鋭意検討中との回答であった。

特設された「Immersive Storytelling Pavilion」に出展したのは、Insta360、Yi Technology、サムスン、Voysis VR、Flir など21社に及んだ。

最近とみにシェアを伸ばしている Insta360は、最大のブースを構えて「Insta360 One」「同 Pro」「同 Nano S」「同 Titan」の売込みを熱心に行っていた。今年9月に発売予定の「Insta360 Titan」については、「Insta360 Proの8Kを上回る10K VR対応にする。また、500m以内の無線通信を実現する予定」と語っていた。Yi Technologyは、「イーヘイロ (Yihalo)」と名付けた没入感をフルに撮影できる8K 3D 360度カメラを出展した。リング状に16台と上部に1台の小型カメラを搭載しているのが特色である。価格を聞いて見たら、17,000円とのことであった。

サムスは、同社が誇る「360 Round VR」カメラを紹介した。リング状にステレオペアのカメラが8セットと上部に1台、つまり全部で17台のカメラが搭載されているのが特色である。

VRに関しては、パビリオン以外に、フラウンホファーHHI、グーグル、Vizrtなども売り込んでいた。フラウンホファーHHIは、同社特製のミラー式VRカメラ「OmniCam 360」を出展して「パノラマ Ultra HD ビデオの撮影とライブストリーミングを実現できる」と語っていた。価格を聞いて見たら、65,000ドルとの回答であった。

なお、会場で聴取した話で興味深かったのは、NBCスポーツが平昌オリンピックの試合を、ターナースポーツが「NCAA March Madness (全米大学体育協会が3



写真4 Yiテクノロジーは、「イーヘイロ (Yihalo)」と名付けた没入感をフルに撮影できる8K 3D 360度カメラを出展して注目を集めた。

月から4月にかけて主催する男子バスケットボールの試合)をVRで放送したという。VRはニッチなマーケットという専門家が多いが、このようなビッグスポーツイベントをライブで提供したというのは予想外であった。なお、VRに関しては、NHKも8K OLEDディスプレイを導入した両眼それぞれ4K解像度の映像を実体験させて話題を呼んだ。コンテンツは、JAXA 筑波宇宙センターのショールームの内部を360度フルに撮影したものであった。

「デジタルラジオ」のステージには、ゲーツエア、ナウテル・ブロードキャスト、ブロードキャスト・エレクトロニクスなどがブースを構えて、デジタルFMラジオ、HDラジオなどのライブデモを行っていた。中でもゲーツエアは、ATSC3.0対応の3種の送信機(高出力UHF用のULXTE、中・低出力UHF用のUAXTE、VHF用のVAXTE)を出展して関心を呼んだ。ラジオ送信機の大手メーカーとして知られるナウテル・ブロードキャストは、「世界177カ国に、各種送信機16,000台をすでに販売済み」と豪語していた。

「マネージメント & システムズ」のステージでは、エパーツ、Enco Systems、Lawoなどの出展が目についた。エパーツは、今回「2018は、IPの年」という旗印を掲げてIPをベースにしたSDVNソリューションのデモを大々的に展開した。ブースの担当者は、「2014年以來すでに世界の100社以上にIPソリューションと機器を納入済み」と語っていた。SMPTE ST2110、AMWA ISO4/05の規格化が進んだことで勢いに乗っているようであった。



写真5 セントラルホールのロビーには、POD Castスタジオが設置され、来場者の関心事となった。

さらに、NABは、南下層ホールの西側に「IPショーケース」を設けてIP化の進展をアピールした。映画テレビ技術者協会(SMPTE)、IPメディアソリューション連盟(AIMS)、国際インターネット放送事業者協会(iabm)、オーディオ工学会(AES)など業界8団体と、日本のNECとソニーを含む50を超える関連メーカーが総力を挙げてプロダクション・スタジオを設営してライブデモを実施した。デモの隣では、関連のセッションが開催され盛り上りをみせていた。

4つ目は、POD Castである。コトバンクによれば、「POD Castは、インターネット経由で、デジタルオーディオプレーヤー向けに音声データを配信するサービス、およびそのシステムを指す」という。今回、NABは、セントラルホールのロビーにPOD Castスタジオを設営して来場者の注目を集めた。実際に運用を行っていたのは、Broadcast Beat(フロリダ州タンパを本拠にする放送・メディア制作会社)である。スタジオの内部を見せてもらったところ、Digico製のデジタル・ミキシング・コンソール、Enco社のプレイアウトシステムなどが設置されていた。スタジオの担当者にPOD Castのいわれと現在サービスを行っているステーションの数を聞いて見たら「デジタル携帯プレーヤー、iPODで簡単に聴くことができるということで普及した。現在ストリーミングサービスを提供している局は4,000を下らない」との回答であった。

Naokira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト